

加納秀夫著 『ワーズワズ』

増谷外世嗣

「自然の力を直観力の神秘的な作用で捉えた少年時代から人間と自然との調和した瞬間を自覚する詩精神の自覚めに達した青年は、自虐的な苛烈さをもって、自己を強化すると同時に、その庶民性は社會の最低生活の中にも、人間の權威と價値とを認めることが出来た。そういった詩精神が現實の社會でどこへ展開して行くか。時の偶然はこの青年詩人の前にフランス革命という絶好の活動舞臺を提供したのである。革命のさ中に全身をなげ入れていった」ワーズワズはフランス人の革命に對する情熱の歡喜に大きな聲援を送った。しかし間もなくこの熱狂も冷却し破壊される時がきた。ロベスピエールの獨宰に始まる恐怖時代である。ダントン派を始めジロンド黨の味方は、「罪なくして黨争の犠牲となつて惨死していった。」その詩人ワーズワズはかく祈つた。

I scarcely had one night of quiet sleep

Such ghastly visions had I of despair

書評

And tyranny, and implements of death,
And long orations which in dreams I pleaded
Before unjust Tribunals, with a voice
Labouring, a brain confused, and a sense,
Of treachery and desertion in the place
The holiest that I know of, my own soul. (Prelude,
1805, ll. 374—81.)

(一夜として靜かな眼りをもつことは殆んどなかった。それほど凄まじい幻影、絶望と壓政の、死の道具の、ながい辯駁の幻影。夢のなかで、不正な判事席の前で、聲をからし、頭は混亂し、裏切られ見棄てられた氣持とたたかいながら、知るかぎりでは最も神聖な場所、即ち私の魂の中で、私はいく度か申立をした。)(原著者大意譯のまま)

長きに失する引用を取つたのは、これだけの部分から浮びあがってくるワーズワズ像の片隣からだけでも、おそらく日本の最大多数のワーズワシアン (Wordsworthians) の抱いている自然詩人ワーズワズの印象像はくつがえされるのではないか、と思つたからである。といふことは、よくも悪くも、日本の自然が、そして日本人の自然觀が嘗ての浪漫詩人の批評家や紹介者達によつて數個のワーズワズの代表詩から紹介されたワーズワズ像と如何に安易に結びついていたか、といふことを私

は暗示したかったからでもある。私は今、「日本の最大多数のワーツワシアン」の誤った印象像」と言った。この私の概括は誤っているだろうか。そして又、民衆の中に浸透している恣意的な詩人の印象像というものを概括するようなことは、ジャーナリスチックな、文學研究外のこととして通り過ぎてしまってもよいことであろうか。

オルダス・ハックスリーが、「熱帯圏のワーツワス」(Wor-dsworth in the Tropics) という一論の中で次のようなことを言っている。

「大抵のまじめな人というのは、直接のインスピレーションからか、或は受け賣りからかは知らないが、いわばワーツワシアンである。彼等にとっては、田舎の自然の中を歩くことは教會へ行くことと同じことなのである。……

ワーツワスがヨーロッパの境界を越えたことがないということとは憐れなことである。彼が熱帯圏を旅していたら、彼の安易な居心地のよい汎神論は癒えていたことだろう。……しかしワーツワスは一度も彼の郷土を離れたことがなかった。ヨーロッパは巧みに庭園化されているので、藝術作品や科學的理論、或はきっちりした哲學體系に似ている。ヨーロッパは人間個人の映像の中に再創造されたのである。そこでは、悪魔の味方である詩人は呪われ、天使が凱歌をあげてしまったのではないか、ああ」(Do What You Will, 1929, pp. 113-129)

ここに述べられているワーツワシアン、及びそのワーツワシ

アンの印象像を基準としてそれに反対する文藝批評の立場は、如何に日本のそれらと似かよっていることであろうか。そしてこのワーツワシアンの意味を最も廣く擴げて行けば、恐らく最も眞面目な英國人である J・M・ミルや M・アーノルドはその代表的ワーツワシアンということになるだろう。ハックスリーが悪魔の味方としてワーツワシアンを皮肉り、その中にある安易な汎神論を攻撃したことはうなづけるが、しかし眞のワーツワスは決してハックスリーの指摘するような庭園化された自然の中の汎神論に安住していたわけではないし、又ワーツワスの詩の中に悪の要素がないわけではない。本書「ワーツワス」の著者はこの点についても、「ゾオドラキールとジュリア」(Zoa-draour and Julia) の戀物語、「流浪する女」(The Female Vagrant) 等の作品の解説によって、それらの中に含まれる人間悪や罪の問題が彼の詩的生涯及び詩的作品の全體とどういふつながりにあるかということも明にしている。更に又、ハックスリーの立場に歸つてのことであるが、ワーツワスが熱帯圏へ旅していたら、恐らく彼はそこに展開される自然と人間との挑戦と調和の世界に亂舞したかも知れない。この想定は恐らくワーツワスの全體を讀んだ人にとっては大して困難な想定ではないだろう。少くとも、彼が熱帯圏を旅することによって彼の自然観は根本的に改變させられていただろう、と想定するよりはである。もし又、悪の味方として、熱帯圏へ行くことと、フランス革命の渦中にあること、との何れを選ぶかについては、こ

こになされているような早計な判断は下せない。要はここになされているような平面的対立としての悪魔と天使との相剋の中に、ワーズワスはいかなかったということであり、あるものはワーズワスの最大公約数的偶像を挟んでの崇拜と攻撃なのである。ワーズワスを批評研究する場合には、この問題は極めて大切なことである。

そこで、この偶像を育てあげてきたものは何であつたか。勿論、特に文學作品や作家や詩人についての偶像を描きやすい人間心理、或は民衆心理そのものの責任や、或はそれを育てあげてきた諸々の社會的責任もあるが、特にワーズワスの場合、具體的な一つの責任として、有名な「ティンターン寺院賦」から「不滅の頌」の作品系列によってワーズワスを紹介してきた批評の立場である。著者はこの點を次のように論じている。

それらは、「手っとり早くワーズワスを知るためには便利な詩かも知れない。ともかくこれがポピュラーで、彼の代表作扱いをされていることは事實であり（少くとも日本においては確固たる事實であるが）、その事について不満はない。しかし、これがポピュラーであり、代表作であることは、他の作品を讀まないでも済むという理由には決してならないこともまた同様の事實である。この事實がとくに強調されなければならないと思うのは、この詩がワーズワスの一面しかしめしていないという言うことにあるかもしれない。もちろんこの一面がワーズワス解釋にとって重要な一面であることは言うまでもない。詩

人は自分と自然とのふしぎな奥行をどこまでも想像力の及ぶかぎり掘り上げてみたのである。彼の掘り上げてゆく縦の深さが、十八世紀の詩人たちには思いもつかなかった神秘をあきらかにしたこと、及び彼がその探求にもちいた努力と眞摯な態度は、近代世界に生きた詩人にして初めて示しうるものであつたことは疑う餘地もないことである。文學史上に近代詩の先驅者としてワーズワスの位置を決定した一つの條件はここ以外にはないと思われる。その意味での重要性はワーズワスの人間性、いや人格といつてもよいが、それを構成する元素のもつ重要性である。

しかし、この重要性は、また同時に詩人が人間精神の横に擴大してゆく展開の限界を見さだめようとする時、すなわち自己と社會との關係という方向にむかつて、彼の想像力が知的な把握をひろげてゆく時、はじめて有機的な意味をもつものである。ワーズワスはそういった把握のためにも全精神をおしげもなく用いたことはフランス革命への同調によって完全にしめされた……。

又、『序曲』の作品としての構成はけっして手際の良いものではないが、それでもなおそこにはワーズワスが試みてきた縦と横との探索がたねねんに描かれている。彼の世界はこの二元的な創造活動によって成立しているのである。『ティンターン寺院賦』と肩をならべるようにして、ポピュラーな代表作とされる『不滅の頌』もまたおなじような奥深さを感じさせると同時

にその物足りなさも同様である。そこで『ティンダーン——不滅』の系列にぞくする作品にはかり注意を集めていく。讀者は、詩人ワーズワスの完全な人間像をとらえることが困難になるのではないかという危惧もでてくるのである。切に危惧であることを望むものの、次のような現象を見のがすことは出来ないものである。すなわち中期をすぎたこの詩人がもはや取るに足らない詩人であるかのように速断されがちなことである。それだけならワーズワス個人の問題としてすませることも不可能ではないが、それが更に大きな問題にまで係累をおよぼすような困った場合も考えられる。たとえば『抒情小曲集』によってイギリス浪漫主義の文學活動がはつきりした相をしめすようになったことは事實として、この詩集のなかにふくまれる作品の一つに——たとえそれがいかに代表的なものであろうと——現われた作者の一面だけを強調することが、浪漫主義文學を全くゆがめられた形において批判される第一原因となることが考えられる。浪漫詩にとり扱われている自然が、作者の恣意による幻影にすぎず、そこには現實から逃避した者の夢があるだけだという批判は現代の批評家にとっては常識であろう。(傍點は筆者の附したもの)

長きに失した引用ではあるが、しかしこの問題意識は極めて重要なことであり、且日本に於けるワーズワスの批評紹介としては缺くべからざる一針なのである。ワーズワスの老大な長詩「序曲」の骨子を丹念に跡づけるだけの仕事でも容易なことでは

はない。というよりもこの作品は、先述のような問題意識が伴われていなくては、その本質を見逃がさずに完讀出来ないほど鈍重で連綿とした作品なのである。その傳記的素材の廣がり、玉石混合の老大きに眼を奪われて、詩精神の立體的成長という本質を見逃してしまったような批評紹介が今までの日本に多かつたことが、この詩人を、先ほどのハックスリーの最大公約数の偶像へと追ひやってしまったのである。これはこの詩人にとつても民衆にとつても一つの不幸であった。この意味で、本書はこの不幸を訂正し、ワーズワスが決して東洋的醍醐味や禪味、或は三十二文字や、「わび」や「さび」の味からは解されない本質的に西歐の詩人であることを示してくれる批評である。

英國に於けるワーズワスの批評研究は彼の死後百年の間に幾度か書きかえられ、彼の批評史をたぐることはこの百年間の英國文藝批評そのものの變遷の一斷面を辿ることとさへある。にも拘らず、先述のハックスリーの立場は形を變えて一九五〇年の今日にまで及んでいる。ワーズワス百年祭記念を迎えての英國に於けるワーズワスへの一つの疑問は、一言に要約すれば、
「一九五〇年の機械文明と産業時代に於けるワーズワスの價值や如何？」というのである。この疑問に潜む非難も、より具體的に言えば、ワーズワスの詩には産業時代や機械文明の中にある苦惱が感じとられないということであろうし、彼の詩に表現された稀に見られる歡喜が、今日的悲觀に挑戰資格を持たな

いということにもなるであろう。しかしこれほどワーツワスの詩の本質を見逃した批評はないし、又その現代の捕虜となつてしまつた批評そのものの立場が反省されていらない常識的批評はないのである。

こう言つた立場とは逆立するかのようによ、H・リードは、先述のワーツワシアンの代表とも目されるミルやアーノルドによつて代表される英國的教養や文化に根本的に反對する批評家であり、且、産業時代に詩人として生きることは殆んど不可能であるとも考ふる詩人でもある。その彼が、その著「ワーツワス」研究によつて、見事に現代に復活するワーツワスの姿を描出した。そして、ここにワーツワスの本質を解く一つの鍵があつたのである。この批評研究は現代に於ける文藝批評そのものの一つの革命でさえあつたのである。しかしそれでも、また一般には、ワーツワスが、既に始まつていた産業革命によつて農産國から近代生産工業國へと移つていった英國に生き、彼の詩の中にそなえてゐる或る衣裝が近代「都市文學」の所産であることを見落しがちなのである。この點についても本書は作品の上から充分ふれて、二十世紀の現在、ワーツワスを再認識することの意義について述べていることは嬉しいことである。一八一五年、ナポレオン戦争の終結を契機に、英國が展開して行った機械文明の中でワーツワスの歌つた一節の引用がある。

An inventive Age

書 評

Has wrought, if not with speed of magic, yet
To most strange issues. I have lived to mark
A new and unforeseen creation rise
From out the labours of a peaceful Land
Wielding her potent enginery to frame
And to produce, with appetite as keen
As that of war, which rests not night or day,
Industrious to destroy ! (The Excursion, Bk. VIII,
ll. 87-95)

(發明時代は、よし魔法の速度ではないにしても實に奇妙な結果をひき起した。いま迄私が生きてきた間にも、新しい思いもよらなかつた創造物が、平和な國の勞力から、生れてくるのに氣がついた。それは強力な機械を驅使して組立て、造り出した戦争と同じような食欲さで、晝夜をわかつたず、破壊することに熱心だつた。)(大意譯原著者譯のま)

外國文學が日本に批評紹介される場合に備えてほしい要素が、少くとも次の三つはあるように思われる。一、作品とそれが創作された環境の正確な肥握。二、それを移植する日本の土壌に於ける問題意識。三、自分がその作品を如何に愛し、その作品と如何に生きたか、ということ。これらの三つは構成原理

としては分離しているようであるが、その批評家個人の中では表離一體となった統一原理でなければならぬ。そして、それが作品の扱い方と批評文のスタイルにまでじみ出ていなければならぬ。文藝批評が哲學や精神科學と基を異にする所以もここにあるはずである。このことは、第一の(作品とその環境要素の正確な把握)がある限り、精神科學から文藝批評の恣意性を非難される所以は毛頭ないのである。むしろ逆に、文藝批評こそが精神科學の一面性と假定の誤謬を指摘する場に立つとさえ言えるのである。この意味に於いて、本書「ワーズワス」は重要な文藝批評の役割を果たしていると言えよう。勿論、細部にわたって注文をつければ幾つかの問題はあるだろう。しかし、それらは末梢である。もし、本書にない大きな注文をつけるとするならば、本書がもっと大部のものになってもよいから、この書物の讀者層を民衆にまでひろげて行く意欲と化粧のほしかったことである。しかし、そのためには、本書は根本から書きかえられねばならないだろう。

先述の第一、第二の点については既にふれたから、第三の点についての一例を拾ってみよう。引用詩の大意譯に、著者のワーズワスへの愛情と、そして譯話の新鮮さが伺われることが何よりであり、又その批評文の内容、スタイル共に著者がこの詩人と長い間がっちり四つに取り組んできたことを示しているのも、その證と云えるだろう。

「この大都會(ロンドン)に限って感じられる一つの印象が

ある。群衆にまじって流れるように動いてゆく時、いわばもつとも身近に人間を見ている時に、その人間の存在が次第にうすれ遠のいてゆく不思議さがあった。山腹をかすめる雲の影か、あるいは夢に訪れる魔性の姿か。ともかく、肉體を動かし、物を考え、口をきく人間の現實感というものが、自分だけを置き去りにして遠のいた現實感を背景にするようにして、ある一つの存在がはつきり浮びあがって、異様な生命と力とを發揮するのであった。

その一例として青年には次のような體驗がある。壁によりかかって、顔をやや上にむけた盲の乞食、その胸にかけた紙に書かれているのは、その乞食の履歷である。

My mind did at this spectacle turn round
As with the night of waters, and it seem'd
To me that in this Label was a type,
Or emblem, of the utmost that we know,
Both of ourselves and of the universe;
And on the shape of the unmoving man,
His fixed face and sightless eyes, I look'd
As if admonish'd from another world.

(Prelude, 1805, ll. 615—22)

(これを見た時、水の流れに巻かれたように私の心は一轉

した。人間存在と宇宙について知られる最大限のことが、その一枚の紙に表象され、象徴されるように思えた。身動きもしない男の固定してしまった顔と光を見失った兩眼から視線をそらすことができなかつた、まるで別の世界から見よと注意されたように。

めまぐるしく回轉する大都會の雑沓からとり残されて、ひとり停んでいる盲目の乞食であるが、これを見る青年がただ一編の憐れみを感じているのではないことは確實であろう。『部分と部分として見ながら、同時に全體をとらえうる力をもって眺める』青年の詩精神は、乞食を乞食として見ながら、同時に包括力をもつ彼の精神は、一見敗殘者のような乞食からも、人間の

生命力以上のものを見るといふのである。」

實はこの部分から、最初の引用へと續くのである。前後を顛倒したような紹介になったが、この評傳そのものは極めて正確な順を追った評傳であり、尙、所謂、ワーズワスの詩精神の衰退期と言われる後期についても、正しい解説がなされている。

(ことわり。特にことわりなく引用した「」内は「ワーズワス」からの引用である。書評ということの未経験である私は、原著の充分な紹介というよりも私の批評論を書いたような結果になった。大方の御寛恕を乞う次第である。)

(二橋大學講師)